

平成 30 年 5 月 2 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02172

研究課題名(和文)ドキュメンタリー映画による環境問題 現代的課題に向き合う映像メディアの研究

研究課題名(英文)Environmental Problems through Documentaries Films: Cinema Confronting Contemporary Social Issues

研究代表者

藤木 秀朗(Fujiki, Hideaki)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90311711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ドキュメンタリー映画が環境問題をどのように描写し扱ってきたかを明らかにすることを目的としていた。より具体的には、(1)日本をグローバルなコンテキストに位置づけ、(2)公害、土地開発、ごみ、食料、地球温暖化、「放射能汚染」の6つ問題を、(3)ドキュメンタリー映画がどのように表象してきたのか、さらにはそうした映画がどのように上映され、社会的にどのような役割を担ってきたのかを考察することを目標とした。研究の進捗にしたがい、311の原発事故後の状況に焦点を合わせ、ドキュメンタリー映画が社会運動、生命と生活の葛藤、自然環境、グローバルなネットワークに取り組んできた状況を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to examine how documentary films have represented and dealt with environmental issues. More specifically, it will try to (1) position the Japanese situations in the global context, (2) highlight the issues of environmental pollution, land development, waste, food, global warming, and radioactive pollution, and (3) show how documentaries have dealt with these issues and how they have been screened and socially functioned. During the course of this project, I have narrowed the scope as I have focused on the situations after the nuclear disaster in March 11, 2011. In doing so, I have revealed the ways in which documentaries have confronted and represented social movements, conflicts between life and livelihood, natural or nonhuman environment, and global nuclear network.

研究分野：映像学

キーワード：映画 ドキュメンタリー 環境問題 メディア 東北大震災 原発事故 環境批評

1. 研究開始当初の背景

ドキュメンタリー映画がどのように環境問題に取り組んできたかを明らかにするにあたっては、主として2つの背景があった。

第1に、近年、哲学、文学(とくに英文学)、社会学などの人文社会科学の分野で、人々の環境問題に関する認識や関わり方に関して、メディア、芸術、文化、日常生活の果たす役割が注目され、研究が進展してきているという背景があった。と同時に、人間が地球にどのように関わってきたのかということを経史的・哲学的に再考しようという研究も盛んになってきた。いうまでもなく、環境問題を考えるにあたっては、自然科学や社会学のさまざまな叢智が欠かせない。しかし、人文学的な観点から自然環境に対して人間・文化が果たしている役割を検証し直す必要性が認識されてきたのである。代表的な研究としては、Ursula K. Heiseの単著 *Sense of Place and Sense of Planet: The Environmental Imagination of the Global* (2008)や Timothy Mortonの単著 *Ecology Without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics* (2009)、Richard Maxwellと Toby Millerの共著 *Greening the Media* (2012)、さらには Greg Garrardの単著 *Ecocriticism* (2011)といった研究があった。本研究も、こうした人文学の問題関心を共有するものであった。

第2に、この研究課題の背景には、人文学における環境問題への注目の高まりと軌を一にして、とりわけ海外では映像学(映画メディア研究)の分野でも、環境問題に関わる映画やその他の映像メディアについての研究が盛んになってきた。その一つの大きなきっかけとなったのが、2014年6月に英国のグラスゴーで開催された第24回スクリーン学会であった。そこでは「風景と環境」が学会全体のテーマに掲げられる、100人余りの発表のほぼすべてがこのテーマに即した問題を扱った。加えて、この分野の代表的な先行研究として、Tommy Gustafssonなどによる編著 *Transnational Ecocinema: Film Culture in an Era of Ecological Transformation* (2012)、Stephen Rustなどによる編著 *Ecocinema Theory and Practice* (2013)、Helen Hughの単著 *Green Documentary* (2014)などがあった。本研究も海外の映像学研究におけるそうした動向に触発されている。

一方で、日本国内では、映画と環境問題に関する研究はほとんど進んでいなかった。本研究の意義は、そうした研究状況に対して先駆をなそうということにもあった。例外としては、水俣病をテーマに多数のドキュメンタリー映画を制作した土本典昭監督や新潟水俣病のドキュメンタリーで脚光を浴びた佐藤真監督などのドキュメンタリー作家の研究、あるいは東京大学情報学環と東京芸術大学映像研究科が中心となって進められている「記録映画アーカイブプロジェクト」があり、両者とも貴重な研究成果を上

げているが、環境問題については部分的な問題として扱われていないのが現状であった。加えて、2011年3月11日の東北大地震における原発事故が環境汚染やそれにまつわる社会問題への注目を加速させたということもあった。本研究は、そうした問題にも答えようとするものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドキュメンタリー映画が環境問題をどのように描写し扱ってきたかを明らかにすることを目的としていた。より具体的には、(1)高度経済成長期の60年代以降の日本を中心にしながらも、それをグローバルなコンテクストに位置づけ、(2)公害、土地開発、ごみ、食料、地球温暖化、「放射能汚染」の6つ問題を、(3)ドキュメンタリー映画がどのように表象してきたのか、さらにはそうした映画がどのように上映され、社会的にどのような役割を担ってきたのかを考察することを目標とした。こうした考察を通して、環境問題をテーマにしたドキュメンタリー映画の歴史と現状を把握するとともに、喫緊の世界的な課題とも言える環境問題の解決に向けて、映像メディア研究の立場から貢献するというのが究極の狙いであった。

ただし、研究の進展にともなって、3.11の原発事故後の状況を扱うドキュメンタリーに焦点を絞った。原発事故後の状況は、単に「放射能汚染」だけが問題になっただけでなく、廃棄物(ごみ)食、地球温暖化の問題とも密接に関わっているし、歴史的に見れば「公害」とも接続して考えるべき問題である。と同時に、研究の進展とともに、単にこの問題を福島の問題に限定するのではなく、むしろ国内的、さらには国際的な問題へと位置づけることの重要性にも気づいた。したがって、当初の大きな目的を修正することにはなったが、しかしテーマを大きく変えることなく、焦点を絞って研究を続行してきた。

3. 研究の方法

研究の方法としては、4つの局面があった。(1)映画作品のデータベース化と視聴。3.11原発事故による影響に取り組んでいる映画のデータベースを作成した。映画作品の形態は、企業が製作したものから個人的な作品までさまざまあるために、厳密にデータベース化することは困難だが、2017年度までに少なくとも150本の映画作品が制作されてきた。このデータは、日々映画上映関連のサイトをチェックするとともに、山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局による「311ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ」や福島映像祭、さらにはブラジルを拠点としたウラン映像祭のデータベースなどを利用した。視聴のために、映画祭や自主上映会に足を運び、DVDで入手できるものは購入した。

(2) 主要な映画作品や環境問題に関する一次資料の調査とインタビュー。一次資料については、書籍、雑誌記事、新聞記事を調査し収集した。また、環境問題に関しては、インターネット上のウェブサイト、ブログ、その他の SNS の情報を収集して分析した。加えて、自主映画制作者の鎌仲ひとみ氏やイアン・トーマス・アッシュ氏にインタビューを行った。

(3) 歴史的・社会的文脈に関する先行研究の検討。環境白書、宮本憲一著『戦後日本公害史論』(2014)、小田康徳編『公害・環境問題史を学ぶ人のために』(2008)、Jeffrey Broadbent の単著 *Environmental Politics in Japan* (1998)、Marquita K. Hill の単著 *Understanding Environmental Pollution* (2010)、Ian L. Pepper などによる編著 *Environmental and Pollution Science*, 2nd ed.(2006)、Greg Gerrard による編著 *The Oxford Handbook of Ecocriticism* (2014)などの基礎文献に当たるとともに、哲学、文学、歴史学を中心にした人文学における環境批評的な研究を幅広く読み進めた。

(4) 映画に関する先行研究の検討と主要映画作品の分析。ドキュメンタリー映画に関わる書籍・論文と、環境と映画に関係する書籍・論文を網羅的に調べ読み進めた。映画作品は、鎌仲ひとみ氏の作品群、イアン・トーマス・アッシュ氏の作品群、船橋淳氏の作品群、北田直俊氏の作品、岩崎雅典氏の作品、NHK ドキュメンタリー、環境省の映画などを中心に分析を行った。

4. 研究成果

成果は、主として以下の4つの主題にわたって成果を発表してきた。

第1に、東日本大震災における福島第一原子力発電所の事故以後の市民の社会運動と映画上映の関係について調査・考察した成果がある。ここでは、環境問題と市民運動の関係を辿るとともに、映画上映が震災後の状況の中でどのように行われ、どのような社会的な意義を持っていたのかを分析した。これを、多様なメディアのネットワーク、知識・関心・行動のネットワーク、市民のネットワークのからまり合い、さらには公共圏と親密圏のせめぎ合いとして示した。事例研究として、鎌仲ひとみ氏によるドキュメンタリー作品の自主上映活動に注目した。これについては、図書④で発表した。

第2に、3.11以後の「放射能汚染」をめぐる状況を表象している二本のドキュメンタリー映画作品、『内部被ばくを生き抜く』(鎌仲ひとみ、2012年)と『A2BC』(イアン・トーマス・アッシュ、2013年)を事例研究に取り上げ、そこに見られる「生活」と「生命」の葛藤を分析した。大量に制作された原発事故後の状況を描く映画作品の中で、こうした葛藤を描く映画はあまりない一方で、他の映画には見られないような現地の住民たちの苦悩を浮き彫りにしている点で非常に重要

である。このことを、「生命」と「生活」の葛藤があたかも解消されるかのように表象する他の多くの映画作品と比較することによって浮き彫りにした。これについては、図書③で発表している。

第3に、人間が地球に介入した時代を指す「アントロポセン」という観点から、原発事故後の人間と非人間の関係が映画でどのように捉えられているのかを分析した成果がある。ここでは、環境省が企画・出資した映画『福島に生きる：除染と復興の物語』(2013年)を皮切りに、『フクシマからの風』(加藤鉄、2011年)、『原発事故5年目の記録』2部作(NHK、2016年)、『Zone 存在しなかった命』(北田直俊、2013年)、『福島 生きものの記録』を事例に取り上げて比較考察した。社会的・理論的状况を示しつつ、4作品がそれぞれの仕方で環境省映画が描く世界が崩壊している状況を提示していることを明らかにした。すなわち、『フクシマからの風』は反資本主義的な牧歌的なヴィジョンを、『被ばくの森』は動物を主題にしながら人間中心主義的なヴィジョンを、『Zone』は動物福利主義とも呼べるヴィジョンを、そして『生きものの記録』はエコロジー的とも呼べるようなヴィジョンを示していることを詳らかにした。これについては、学会発表、

および雑誌論文 で発表し、図書 に英語論文が掲載されることが決定している。

第4に、原子力エネルギーのグローバルな生産・流通・廃棄のプロセスを描き出すドキュメンタリー映画作品を分析した成果がある。ここでは、フランス映画 *Waste, Nuclear, Nightmare* (2009)、オーストラリア映画 *Uranium, Is It A Country?* (2004)、ドイツ映画 *Yellow Cake* (2010)、日本映画『原発と日本』(2014年)などを事例に取り上げた。福島での原発事故後の映画の大半が福島や日本という閉じた空間ばかりに焦点を合わせてグローバルな規模での原発の問題を軽視していたのに対して、これらの映画はそれがいかにグローバルな規模でポストコロナルな問題とも絡んでいるかを見せている。このことを、放射性物質という物質性の表象、ウランの発掘・加工から廃棄物に至るまでの過程、原子力エネルギーに関わる産業・政府・科学者のネットワークの表象の点から明らかにした。この成果は、口頭発表、 で発表し、現在論文にまとめようとしているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

藤本秀朗「アントロポセンの脱自然化 3.11 原発災害後のドキュメンタリーにおけるランドスケープ、動物、場(所)」『JunCture 超域的日本文化研究』08号、2017年3月、48~65頁、査読無

〔学会発表〕(計6件)

Hideaki Fujiki. “De-naturalizing the Anthropocene: Documentaries on Landscape, Animals, and Place in Post-3.11 Nuclear Disaster.” Invited lecture. University of Minnesota, November 21, 2017.

Hideaki Fujiki. “Politicizing the Hyper-Radioactive Circulation: Documentaries (De-)territorializing Fukushima.” Knowledge/Culture/Ecologies 2017, Biblioteca Nicanor Parra, Santiago, Chile, November 17, 2017.

Hideaki Fujiki. “Politicizing the Circuit of Radioactive Matter through Documentary.” Visible Evidence Conference XXIV, Alianza Francesa, Buenos Aires, Argentine, August 3rd, 2017.

Hideaki Fujiki. “Making It Globally Imaginable: The Cinematic Representation of Radioactive Waste.” 11th Crossroads in Cultural Studies Conference, Association for Cultural Studies, University of Sydney, Australia, December 16th, 2016.

藤木秀朗「アントロポセンの脱/自然化——3.11 原発災害後のドキュメンタリー」, 国際シンポジウム「文化に媒介された環境問題——東アジア関係学のエコロジー的探究」, 於名古屋大学、2016年7月30日

Hideaki Fujiki. “Representing the Radioactive Environment: The Politics of Documentary Films about the Post-3.11 Nuclear Catastrophe.” International Conference on Non-Anthropocentric Perspectives on Politics. Hannover Institute for Philosophical Research, Germany, January 22nd, 2016.

〔図書〕(計4件)

Hideaki Fujiki and Alastair Phillips, eds. *The Japanese Cinema Book*. London: British Film Institute, forthcoming (出版決定) 査読有

Hideaki Fujiki. “De-naturalizing the Anthropocene: Landscape, Animals, and Place in Post-3.11 Nuclear Disaster Documentaries.” In *Asian Ecocinema Studies*, eds. Scott Slovic, Winnie Yee, and Kiu-wai Chu. Hong Kong: Hong Kong University Press, forthcoming. (掲載出版決定) 査読有

Hideaki Fujiki. “Problematizing Life: Documentary Film on the 3.11 Nuclear Catastrophe.” In *Fukushima and the Arts: Negotiating Nuclear Disaster*, eds. Kristina Iwata Weickgenannt and Barbara Geilhorn. London and New York: Routledge, 2016, pp. 90-109.

Hideaki Fujiki. “Networking Citizens through Film Screenings: Cinema and Media in the Post-3.11 Social Movement.” *Media Convergence in Japan*, eds. Jason G. Karlin and Patrick Galbraith. Ann Arbor, MI: Kinema Club, 2016, pp. 60-87. 査読有

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤木秀朗 (FUJIKI HIDEAKI)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授 研究者番号:90311711

研究者番号：

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()